

編集後記

スマートフォン端末の爆発的普及に代表される ICT 環境の大幅な変化に対応するだけでなく、主体的・能動的に学習する（アクティブ・ラーニング）環境を構築するため、大学で提供すべきサービスや ICT 環境も大幅な変化が求められている。今回、ご投稿いただいた原稿を拝見したところ、e-Learning 教材の開発やスマホを用いた授業といった大学教育に関する報告が2件、発展著しい ICT の心理療法への適用に関する報告が1件あり、まさに昨今の教育環境・ICT 環境の変化を踏まえた上での報告であろう。また、昨年度の年報でも、所員会議の委員が中心となり、BYOD（Bring Your Own Device）やキャンパスクラウド化を検討した結果を報告したが、今年度も引き続き BYOD を検討するだけでなく、アクティブ・ラーニングを念頭に実際の授業を踏まえた上での関大 LMS の利用法の検討、スマートフォン端末を前提とし、教職員だけでなく学生にとって利用しやすい次期インフォメーションシステムの検討などを所員会議にて新たに行っている。課題は山積みしているものの、一つ一つ課題を解決し、現代の環境に合わせたサービスを提供していきたいと考えている。

ICT 環境は目まぐるしく変化しているのだが、その環境下での各種サービスを利用するユーザ側にも求められるものは多い。その一つが情報セキュリティ・情報モラルであることには論を俟たないであろう。IT センターでは、毎年、情報セキュリティ啓発キャンペーンを実施しており、2017年度は独立行政法人情報処理推進機構（IPA）から講師をお招きして、スマートフォンのセキュリティや適切な SNS 利用についてご講演いただく予定である。また、IT センターとしても、2017年5月に発信している「【注意喚起】国内外における大規模なランサムウェア感染の対策について」のように、様々な注意喚起を促す情報を発信している。このようなキャンペーンや注意喚起だけでなく、ミニセミナーの開催も含め、より一層、教職員・学生の情報セキュリティ・情報モラルの意識向上に務める予定である。

さて、ここで上述の情報セキュリティの注意喚起に関して出てきたワード「ランサムウェア」をご存知だろうか。この言葉は、Ransom（身代金）と Software（ソフトウェア）を組み合わせた造語であり、簡単に内容を説明すれば、PC のファイルを暗号化して読めなくし、ファイルの暗号化を解いてほしければ、身代金を払えと脅迫するマルウェアである。昨今、フィッシング詐欺が急増しているように、現代の攻撃者の目的の多くは金銭であり、あの手この手でユーザから金銭を取ろうとしている点に注意する必要がある。

さらに、人の心理的な隙間をついて攻撃するソーシャル・エンジニアリングのように、一昔前と比べて攻撃の手口が極めて巧妙化している。これらの攻撃は、知っていても対処が難しいこともあるほどであり、知らなければいつ被害に遭ってもおかしくない状況にある。“セキュリティソフトを導入して終わり”という状況では既になく、正しい知識や対処法をユーザ自身が知っておくことが求められる時代になっており、近年制定された法律「サイバーセキュリティ基本法」でも第九条で同種の内容が規定されている。もしランサムウェアという

言葉を知らない、もしくは言葉しか聞いたことがないという人がいたら、自身の情報セキュリティ・情報モラルの意識向上を図るためにも、例えばIPAが毎年公開している「情報セキュリティ10大脅威」を閲覧するなどして、定期的に現在の情報を手に入れ、最新の状況を把握しておいてもらいたい。

最後に、本書の刊行にあたり、ご多忙の中、ご執筆頂いた諸先生方や、各種データを取りまとめ頂いた職員の方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます次第である。

2017年6月

(ITセンター副所長 河野 和宏)